

オープンキャンパス

模擬授業

◆多摩キャンパス(文系学部対象)

7月18日(日)・8月1日(日)・8月8日(日)

◆後楽園キャンパス(理工学部対象)

7月25日(日)・8月7日(土)・8月8日(日)



「法を学ぶということとは  
どうということなのか」

法学部 橋本基弘教授

模擬授業開始15分前に83008号

教室へ行くと、すでに座席はほとんど埋まっていた。橋本基弘先生の講

義は、学生の間でわかりやすいと評判で人気だ。高校生にもそれが伝

わっているのだろう。配られたレ

ジュメを読みながら、講義の開始を待った。

法という眼鏡で社会を見る

「今日は、法学部はおもしろいところだということを知ってほしい

です」。橋本先生はこう口火を切って、模擬授業を始めた。

「法を学ぶということは、法という眼鏡で社会を見る技術を身につけること。そして最終的には、人間とはどんな生き物なのかを考えることです」と、この日の授業のテーマについて説明。授業は実際に裁判になった事例を参考に進んだ。

ある病気の患者とその家族に支払われる補助金の支払いを遺族である娘が申し出たところ、その患者であった父の認知がなく親子関係がないことを理由に支払いを拒絶され、そのときすでに父の死後7年が経過していたという事例だ。

民法787条によれば、父または母の死後3年が経過すると認知の訴えをすることができない。立法の背景には戦時中の社会状況が関係しているのだが、「戦時中とは社会が大きく変わったのに、まだそんな規定があつていいのか」と橋本先生は問いかける。死後認知制度の合憲性の問題だ。

存在理由ない法律はいらない

黒板に図を書きながら法律上の親子関係について説明し、「父子関係は法律上当然に発生するものではないんです」とポイントを指摘。「法の条文を覚えるだけでなく、条文の存在意義を考えることも法律学」と解説し、「法律は生きもので、いつかいらなくなってくる。存在理由のないものはいらainんです」と強調した。

途中、橋本先生は「大学教師は字が下手な人間が多くて、私もその一人なんです。読めますよね？」と笑いを誘い、教室の雰囲気のを和ませる。

続いて橋本先生は法学部に進む動機に言及し、それには「法に興味があるから」と「ほかに行く所がないから」のふたつに分かれるという。そのうえで「数学がダメだと経済や商学部は厳しい。文学的素養がないと文学部も大変。芸術系はさらに才能が必要」と話し、結論として「数学ができなくて、文学的・芸術的才

能がない人はぜひ法学部へ来てくだ  
さい」とアピール。この説得に、会  
場からは一斉に笑いが起きた。

### 素朴な正義感を持つ

また法学部の学生に必要な資質に  
ついても触れ、「日本語がわかること  
ある程度、理屈がわかること。素朴  
な正義感を持っていること」の3つ  
を挙げ、「ちゃんと勉強すればみん  
な一定のレベルまで行けるのが法律  
の特徴です」と法律への関心を誘っ  
た。



法学部 橋本基弘教授

「人間社会にトラブルはつきもの  
であり、問題を解決するためには仕  
組みが必要。法学の勉強はとつても  
楽しいし、意義のあること。ぜひ選  
択肢のひとつに法学部を入れてくだ  
さい」と法学部をアピールして、模  
擬授業を締めくくった。

講義終了後、レジュメを持って質  
問に来た高校生に先生は丁寧に応え  
ていた。

(学生記者 野崎みゆき) 法学部3  
年)

## キャリアデザイン入門 —経済学とはたらくこと



経済学部 松丸和夫教授

「キャリアデザイン」は学生のみ  
ならず、受験生にも関心が高いテー  
マなのだろう。教室には、続々と受  
験生や保護者が集まり、講義の開始  
を待つ間、事前配布されたレジュメ  
に真剣に目を通していった。

### 数字に隠された背景を考える

冒頭、松丸先生は「自らの人生を  
どのように描いていくかというのが、  
キャリアデザイン」と紹介したうえ  
で、数字のクイズと題して、スクリー  
ンに5・6%、4・9%、5・3%  
の3つの数字を映し出した。答えは、  
6月末時点での日本の完全失業率で、  
順に男性、女性、平均を示した値で  
あった。

経済学の視点に立って、松丸先生  
は「生きた知識としてデータを見る  
ためには、数字が何を示すのか、数  
字から何が分かるのかといった、背

景に隠されている事柄を考えるとい  
う過程が必要ですよ」と強調した。

平均失業率5・3%という数字に、  
教室からは不安まじりのため息がも  
れるなか、次に「就職」というキー  
ワードが出ると、受講者の視線が一  
気にスクリーンに集まった。

### 大学4年間で将来を左右する

そこで松丸先生は、入学したばか  
りの大学1年生をキャリアデザイン  
の観点から4つのパターンに分けた。  
第1は入学時点でキャリア形成済み  
ともいえる『目的志向型』。第2は  
大学の学びを生かしたいと真剣に考  
えながらもキャリアを決めきれない  
『人生模索型』。第3は授業もサー  
クルもほとんど真面目に頑張る『パ  
ラエティ型』。そして第4が再チャ  
レンジ志向の強い『不本意型』だ。  
今は昔と違い、選択肢も多く、迷っ



経済学部 松丸和夫教授

たり悩んだりすることが出来る時代になったなかで、松丸先生は「大学的に自分に合うものを見つけていくのでも遅くない。4年間の過ごし方次第で、将来を左右すると言っても過言ではない」と強調。

そのうえで「経済学をベースに、よりよく生きるための知恵や力を学び、社会の様々な分野で活躍できる人材を育成することを目指している」とさりげなく経済学部をアピールした。

### 自ら考え、計画し行動する

ニート (NEET)、フリーター、3年離職などという言葉が飛び交う現代社会は、就業力を持った学生が求められている。それに備えるために、松丸先生は「自ら考え、計画し、行動する。友人に合わせるのではなく、自分が周りをリードしていくような生き方が出来るようになってほしい」とアドバイスした。

(学生記者 三島薫 経済学部1年)

## 企業と人材

### —これまでとこれから



商学部 関口定一教授

「企業と人材」をテーマに、授業が始まってまず関口先生は、企業にとつての人材の大切さを解説し始めた。

### 企業に最も重要なのは人材

「企業は、人、金と物と情報から成り立っている」としたうえで、「特に人と情報の動きを見るのが大事だが、人の役割が最も大事な存在となってくる」と述べ、企業にとつての人材の重要性を強調した。

こうした観点から、この後の講義は「人材と雇用」を焦点にすめられ、関口先生は、社会問題化している大学新卒者の就職問題を取り上げた。景気回復がおぼつかないなかで、就職環境の悪化は、大学生にとつては切実な問題だ。

その原因は何なのだろうか？ 経済成長の停止、世界同時不況、人件費

の削減など様々あるが、関口先生は「大学進学者の急増も大きな原因かもしれない」と指摘した。

大学進学者が増加すると、希望通りに就職するのが難しくなる。せっかく大学で専門的な知識を得ても、就きたい職業に就けない。高校を卒業して就職した人達と同じような仕事につくケースも出てくるだろう。大学新卒者の就職内定率が悪いのも、学生が企業選びに二の足を踏んでしまっている面もあるというわけだ。

### なぜ雇用環境は変わったのか

次に関口先生は雇用環境の変化に話を移した。

時代の流れとともに、雇用形態が多様化し、正社員にかわって、パートタイマー、派遣、アルバイトなど非正社員の割合が年々大きくなってきている。これはグローバル競争、

株主資本主義化などが雇用環境に変化を及ぼしていることが大きい。なかでも株主資本主義化の影響は大きく、「今までは専門的な知識がある人が会社を運営してきたが、現在では株主が主要になってきている。株主は自己の利益を最大限に求めようとするため、雇用者にとっては厳しい状況となってしまう」と関口先生は解説した。

これまでの雇用形態は終身雇用制

のため正社員が中心で、非正社員の割合は小さかった。ところが現在では、非正社員の割合が大きくなり、報酬の格差も拡大している。女性は非正社員になる可能性が大きく、理由として「女性への家事負担がいまだに大きいことと、35歳すぎの正社員採用を企業が行っていないことなどが挙げられる」という。

今後はグローバルで流動的に



商学部 関口定一教授

関口先生は、「一度しか乗れない列車に乗り遅れてしまったら、格差という負を背負っていかなければならなくなってしまう」という状態をなくすため、よりオープンで柔軟な

雇用制度をつくってゆくことが課題となる、と強調して授業を締めくくった。  
(学生記者 佐々木里佳 || 経済学部 2年)

# 中国語入門

文学部 讚井唯允教授

北京語と広東語はまるで異言語

讚井唯允教授による「中国語入門」の模擬授業は、「中国は多民族・多言語国家で、私たちが中国語と呼んでいる言語は、最大多数の民族である漢族が話している言語で、中国では漢語と称しています」という解説ではじまった。

中国語にも「標準語」と「方言」があつて、標準語にあたるのが「北京普通話(北京語)」。方言の種類は日本と同じで地域ごとに多様に存在するが、おもに「八大方言」に大別される。その八大方言の一つが広東語だ。

続けて「漢語にも標準語と方言があります。本日の授業ではみなさんに、簡単な標準語と方言の一種である広東語を話せるようになっていただきます」と讚井先生。朗らかな笑顔と、やわらかな口調に、教室を埋めた高校生らは、自然に講義に引き寄せられた。

「おなじ中国語でも北京語と広東語では、発音、声調、語彙、文法、あらゆる面において異なります。日本語の方言なんてかわいいものです」と讚井先生。「北京語と広東語の違いはもはや方言という概念の域を超え、まったく別の言語に感じる

のではないでしょう。英語とフランス語もしくはドイツ語の違いくらい大きなものなのです」と続けた。

この説明を裏付けるために、讃井先生は「学校」という文字を黒板に書き、その下に北京語、広東語それぞれの読み方のふりがなであるピンインを記した。北京語は「xuejiao」広東語は「hok haun」と表記され、先生が実際に発音してみるとその違いは更に際立って聞こえた。これには教室内はざわつき出し、興味津津

に顔を見合わせる高校生の姿もみられた。

### 生徒参加型授業で教室に活気

次に、先生は1から10までの数字を黒板に書き、「北京語と広東語の数字の読み方の違いです。黙っていても退屈しようから、みなさん私も退屈しようから、みなさんでも私のあとに続いて一緒に発音してみましょう」と呼び掛けると、意欲旺盛な高校生たちがリビートし、教室内は一気に活気に満ちた。生徒参加



文学部 讃井唯允教授

型の授業に、参加者は北京語と広東語がまるで異言語であるという面白さを体で感じる事ができたようだ。讃井先生は、前列に座って熱心にノートをとっていた女子高生に、「北京語と広東語どちらに親しみを感ぜましたか？」と質問。中国語を勉強しているという女子高生は、少し恥ずかしそうに「北京語のほうが、勉

強しているせいか発音はしやすかったです。広東語は発音がより難しく癖があるけど、一方でかわいらしい感じがします」としっかりと答えていた。授業は終始和やかな雰囲気ですすめられ、あつという間の50分だった。(学生記者 熊谷百夏 法学部1年)

## メディア表現と能力開発

総合政策学部 松野良一教授

授業開始前に大勢の受講者で埋まった教室は、女性が半数以上を占めていた。「メディア表現と能力開発」というテーマが女性の関心を誘ったようだ。松野良一教授は、大学卒業後勤めた新聞社、テレビ局での経験談を紹介しながら、授業を始めた。

### メディア表現で能力を開発

最初に松野先生は、一つの映像作品が出来上がるまでの流れをスク

リーンに映し出し、「この一つの流れを体験することで、授業だけでは身に着けることが出来ない、たくさん能力を学生に開発させることができる」と強調。例えば、取材をお願いするために必要な交渉力や、力を合わせ、締め切りに間に合わせることによって育まれる協調性、撮影を通して磨かれる感性、などをあげた。

続けて松野先生は「学生に対して難しい方法論を言っても実践してく

れない。だから、最初にPVを作ることにしている」と紹介し、今年の1年生の作品をスクリーンに映し出した。

1曲の音楽にあわせて、作りあげられた作品はわずか数分間であったが、受講者の心を奪うような感動的なものであった。「作品を作り終わると、大部分の学生が『映像には情緒的インパクトがある』ということに気がつきます。そして『やればで

きる』という自己効力感を獲得できるのです」と松野先生。

### 小学生に番組制作を指導

「映像表現能力を身に着ける」試みの一つとして、松野先生の研究室では小学生にテレビ番組制作を指導している。番組は、①レポート②インタビュー③雑観の3要素で制作するが、この活動を通して小学生でもテレビを批判的に観ることができ

ようになり、コミュニケーション能力が向上しているという。

また、松野先生は、FLPゼミで制作している「多摩探検隊」という番組は多摩地域などのケーブルテレビ8局、アメリカでも放送されていることを紹介。この番組は企画、取材、撮影、編集、パッケージ化のすべてを学生が行い、これまでに数多くの名誉ある賞を受賞している。

某テレビ局に入社したゼミの卒業生は、「中大に入学した頃は東大生に100mの差をつけられていたが、ゼミで学んだ実践的な力によって卒業したら、東大生に100m以上の

差をつけていた」と言って、ゼミ活動に感謝したという。

### 「人間とは何か」を考える

最後に松野先生は、「番組制作を通じた、たくさんの人との出会いによって、『人間とは何か?』『生きることは何か?』ということを考えることがとても大切なことです。そして、メディア教育によって育まれるコミュニケーション能力は就活にも役に立つでしょう」と強調して、授業を締めくくった。

(学生記者 梶彩夏Ⅱ文学部1年)



総合政策学部 松野良一教授

## 「失敗は成功の母」



理工学部 加茂文三准教授

### 有名化学者の成功体験を紹介

『失敗は成功の母である』という大きなテーマで、授業ははじめた。応用化学科の大学院生である記者は、学部4年次に受けて以来、5年ぶりの授業ということもあって、期待を持って教室に向かった。

加茂先生は化学の中でも、高分子という分野が専門。「この分野は出てからまだ1世紀にも満たない新しい分野の一つで、数多くの偶然



### 理工学部 加茂文三准教授

から発展してきてい  
る」。そんな前置き  
から始まり、加茂先  
生は様々な有名化学  
者の偶然から得られ  
た大きな成功体験を  
紹介した。

中でもまず、偶然  
に偶然が重なって大  
発見となった、ノー  
ベル化学賞受賞者で  
ある白川秀樹先生  
の研究を挙げられ  
た。白川先生が行っ  
た研究は、導電性ポ  
リアセチレンの研究  
である。この研究を  
行っている時、『触  
媒』という実験には  
欠かせない材料の濃  
度を1000倍濃く  
してしまったという  
偶然が大発見をもた  
らした。しかし、実  
はこの『触媒』自身  
も、その発見がノー

ベル化学賞の対象となつたもので  
あった。発見者である Ziegler (チー  
グラ) の実験上のちよつとした偶  
然、Ziegler が隣の研究室から或る  
実験装置を借り、またその装置が微  
量の或る化学物質によつて汚れてい  
た、という偶然がなければ、この『触  
媒』の大発見は生まれなかつたので  
ある。

もう一つの例として、日本人で4  
人目のノーベル化学賞受賞者である  
島津製作所の田中耕一さんを挙げら  
れた。田中さんの研究は『生体高分  
子の同定および構造解析のための手  
法の開発』というものであった。こ  
れは、タンパク質などの生体高分子  
を質量分析する方法を開発するとい  
う研究である。生体高分子はそのま  
まの状態では質量分析ができない。  
そのため、緩衝材としていくつかの  
物質を1つずつ入れながら試してい  
くはずだった。ある時、間違えてそ  
れらを一度に入れてしまった。しか  
し、この方法が結果的には良い方法  
だったのである。

他にも、化学関連物質に限ってみ

ても、セルロイド、安全ガラス(合  
わせガラス)、テフロン、ゴム、ホ  
カロン(携帯用カイロ)、アスパル  
テム(人口甘味料)、クラウンエー  
テルなど、数えだしたらきりがな  
いほどに多くの物が、『偶然』が引き  
金となって発明され、社会に貢献し  
てきているのである。

### 偶然や失敗の探求が創造へ

最後に加茂先生は、『Serendipity』  
という造語が大きく書かれたスライ  
ドを映し出した。この言葉は偶然と  
察知を組み合わせて『偶察』と翻訳  
している人もいる。偶然から真理を  
探求することで必然や定義が生まれ  
ものの創造へと繋がっていくという  
意味の造語だ。

こんな造語が生まれるくらい、科  
学では偶然が重なって明らかになっ  
ていくことが多いのだろう。現在、  
科学を学んでいる最中である記者に  
とって、とても印象に残る授業で  
あった。

(学生記者 橋本奈緒美 II 理工学研  
究科博士後期3年)